

手習子

長唄

全詞章

変化舞踊「杜若七重の染衣」「姿花秋七種」の一

資料の題名『手ならひ子』

今を盛りの花の山、来ても三芳野花の蔭、あかぬ眺の可愛らし、遅桜まだ苔なり、
花娘寺子戻りの道草に、てんと見事な色桜、ひな草結ぶ島田鬘、はしたないやら恋しいやら
肩縫ひ上げのしどけなく紙擦くひ切る縁むすび、ほどけかかりし繻子の帯、振の袂のこぼれ
梅、花の笑顔のいとしらし

ふたつ文字から書そめて、愔気恥かし角文字の、すぐな心のひと筋に、お
師匠さんのおつしやつたを、ほんに忘れはせぬけれど

ふつつり愔気せまいぞと、矯んで見ても情けなや

まだ娘氣の跡や先、あづまへもなきあどなきは、粹なとりなり目に立つ娘

娘娘とたくさんにさうに、言ふてお呉れな手習ひ覚え琴や三甲線踊の稽古

言はずかたらぬ我が心、乱れし髪 of 乱るるもつれないは唯移り気な、どうでも男は悪性者
さくらさくら諷はれていふて袂のわけ二つ、勤めさへ唯うかうかと、どうでも女子は悪性者、
東育ちは蓮葉なものぢやへ

恋のいろはにほの字を書て、それで浮名のちりぬるをわか、よたれそつねならむうゐ心おく
山けふこえて、逢ふた夢みし嬉しさに、飲めどもさきに酔ひもせず、京ぞ恋路の清書なり
つまの為とて天神様へ願かけて、梅を断ちます明白サア、われ一代立ちます明白、梅を梅を
立ちます明白、サアわれ一代実ほんに、さうぢやいな品もよや

請鳥の囀り、稍稍の枝にうつりて風に翼のひらひらひら、梅と椿の花笠着せて着せて、
眺つきせぬ春景色